

近江商人研究ノート

(Study note of Ohmi Merchants)

F.B.N.ジャパン 理事 高梨一郎

F.B.N.Japan Director Ichiro Takanashi

はじめに

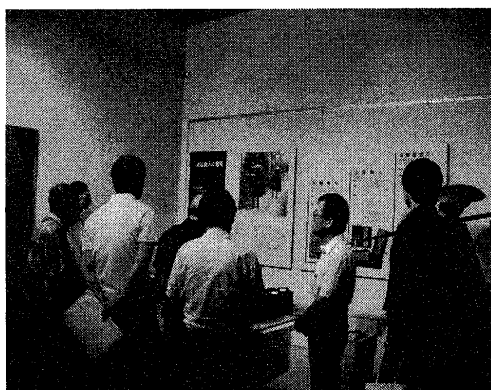
総合商社、銀行を始め現在活躍している企業で近江商人の系譜を引き継ぐ企業は実に多い。平成 17 年 8 月 28 日、29 日にかけて、その真髄を探るべく近江を訪問した。

1. 近江商人博物館訪問

◇近江商人とは

近江商人とは江戸時代から明治にかけて全国で活躍した近江国（滋賀県）出身の商人のことである。他国への行商が特徴であり、近江国内のみで商業に従事した商人は近江商人と呼ばないということである。また、近江商人という言葉には実に多くの商人を輩出し、その独自の商法、性格、特質を現す意味も込められている。特に、五箇荘から多くの近江商人が輩出されており、なぜ五箇荘から多くの商人が生まれたのかが注目されている。つまり、五箇荘には東山道（中仙道）は通っているが宿場町ではなく、八幡、日野が城下町であったことと比較しても五箇荘は農村地帯にすぎなかったからである。その要因として以下の説が言われている。

- * 地理的な優位性－滋賀県の中央に五箇荘があり昔から東西交易の中心として東山道などの主要な幹線が走っており、京の玄関口として物資を運ぶ中継地点であった。
- * 商業の発展素地－近江商人が生まれる前（中世）から座を中心に商人が活躍していた為に商業の発達素地があった。
- * 高い教育水準－後世の研究で五箇荘には寺子屋の数が多く、当時 26 集落 1 万 2 千人で 10 箇所の寺子屋があったと言われている。読み・書きだけでなく算術も教えていたようであり、これら教育水準の高さも多くの商人を輩出した要因と考えられている。



(近江商人博物館)

◇近江商人のルーツ（中世商人）

当時、商人達は四本商人・五箇商人など出身別にグループを形成していた。両方のグループに属し力を持っていたのが五箇荘の小幡商人であった。永禄11年織田信長の近江進行、安土城築城とともに多くの小幡商人は安土城下に移ったと言われている。その後、近江八幡へ移動し日本だけでなくベトナム、シャムまで移動する近江商人に育っていった。その証拠として、江戸時代にベトナムから送られた友好関係を期待する書状が残っている。江戸時代に入ると小幡商人の名は消えてしまうが、その優れた商才は八幡商人、五箇荘商人に名を変えて受け継がれていくことになる。豪商の西谷家、西村家の祖先も小幡商人であったと言われている。多くの豪商を輩出し近江商人の基礎を築いたのが小幡商人である。

彼ら中世商人の活動範囲は近江国内と思われがちであるが、当時としてはかなり広範囲の商いに携わっていたと考えられる。湖内商人が後白河天皇から賜ったとされる偽文書が残されているが、それには3000匹の馬を使って、東は箱根、南は九州、北は佐渡に至る地域で自由往来による商売を認めることが記載されている。これは、偽文書であり事実とは異なると思われるが、近江国内だけに留まらずかなり広範囲に渡る商をしていたことが窺い知れる。

◇近江商人の特徴

近江商人は天秤棒一本で全国に出かける行商の形態をとっていた。各商人で商う地域も商品も様々である。それは、近江商人の特徴として先取の気性があり、人の行っていない事をするところに起因していると考えられている。行商で規模が大きくなると出店（でみせ）を出したり、産物回しと言って、地方で買った物を江戸や京に回す商いをするなど様々な商いに広がっていった。また、八幡商人、日野商人は城下町であり身分は「商人」であるが、五箇荘商人は身分としては農民で農閑期に商売をする形態をとっていた。

八幡商人

活動時期：江戸時代前期

取扱商品：蚊帳、畳表、麻布

特 色：「八幡の本店」と言われるように大型店舗経営
北海道（蝦夷）交易
早くから江戸へ進出

日野商人

活動時期：江戸時代中期

取扱商品：漆器、薬

特 色：「日野の千両店」と言われるように小規模による多数の出店
醸造業に携わっている商人が多い
薬の行商で有名

五箇荘商人

活動時期：江戸時代後期

取扱商品：呉服、太物

特 色：農閑期の商業として行商を行った
商いが大きくなっても本宅は五箇荘に置いた

◇商人の出世

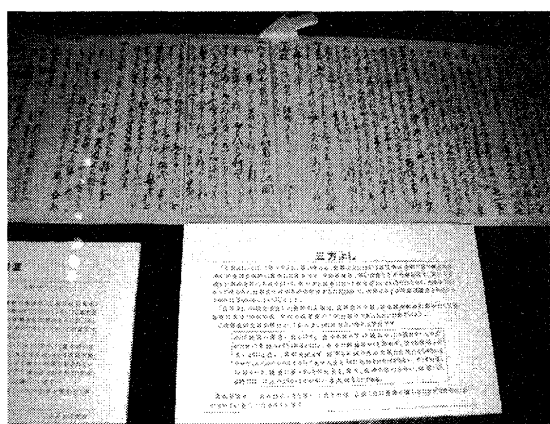
商人は最初丁稚奉公から始まり、登り制度を経て残った者が別家（のれんわけ）を許される。登り制度とは出店（でみせ）で数年間奉公させ、その後親元へ帰郷させる。そして、その間に再勤務させるかどうか判断する。再勤務が許されると出店（でみせ）に戻るが、許可がでないと解雇になってしまう。登りの回数を重ねるにつれて職位、待遇が変わってくる。一種の昇進制度である。また、別家の時は本家から家名と財産の分与をされる。つまり、能力のある者だけが選別され店を任されるのである。

◇家訓（三方よし）

近江商人の精神を表すものに「三法よし」がある。江戸時代の中頃、五箇荘の麻布商人であった中村治兵衛（70歳）が若くして息子を亡くし、孫娘に15歳の養子を迎えて家業を継がせる時に、商いの心得や遺産相続などを書き残した書置きで24ヶ条からなっている。あくまで私的な書置き（遺言）であるが、その中に他国商いの心得が書かれている。この心得が近江商人の精神を端的に表しているとして紹介されたものである。実際の文書の中には「売り手よし、買い手よし、世間よし」という記述は無いが後世に意識されて「三法よし」となっている。この古文書は長らく行方不明であったが平成10年にアキンド委

員会によって原典を見つけることができた。原典は重要文化財に指定、博物館の展示品はレプリカである。

「三法よし」が注目されるのは、それほど大きくはない商人で、しかも後継者に渡す私的な文書にも関わらず近江商人の商売を行う上での心構えを端的に、しかも読みやすい文書で表現されていることである。その事を考えると、多くの近江商人は商業活動だけで成功するのではなく、精神性の深いものを持っていて、それが成功の裏打ちとされている証であると思われる。



(三法よしの文書)

近江には「三法よし」の他にも多くの商人の教え（家訓）が残されている。これらの教え（家訓）はそれぞれの店に残っているものであるが、中井玄左衛門、松居久左衛門などは自らの成功体験、座右の銘を刷り物にして配っていたようである。この事は、近江商人は自分だけが成功するのではなく他の人も成功するように、又地域全体が豊かになることを念頭に置いていたと考えられている。

2. 近江、町並み保存地区訪問

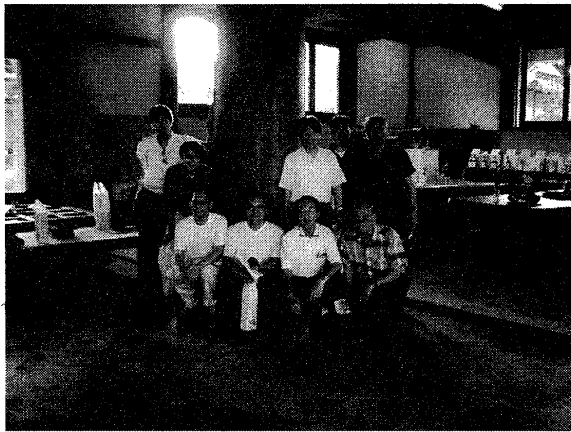
八幡商人の本拠地として、当時の面影を残す町並みが保存されている。近江郷土資料館、旧伴家住宅、旧西川家住宅を見学。



(旧西川家住宅)

3. 藤居本家訪問

琵琶湖を抱く近江の地域は良質の米と水に恵まれ、古くから酒造りが盛んな地であったと言われている。藤居本家は江戸時代から代々酒造りを家業として現在に至っている。特に新嘗祭の御神酒（白酒、黒酒）を宮中へ献上している由緒のある酒元である。また、藤居家の敷地には中井源左衛門氏の邸宅が移築保存されている。



(藤居本家)

4. たねや 近江文庫

近江文庫とは株式会社たねやが中心となって設立したNPO法人であり、近江に関する書籍収集をはじめ、風土、歴史、お菓子と文化を学び伝えることを目的としている。当日は専務理事の川島氏に近江商人についてお話を伺った。近江文庫は日牟禮ヴィレッジ内のヴォーリス建築の建物を移築した二階に事務所がある。

八幡、日野、五箇荘から多くの近江商人が生まれている。その事については色々な説が言われている。一つは渡来人説である。近江は京都以上に歴史が古く、渡来人説を裏付ける証拠も残っている。例えば、近くに小倉谷があり、そこは「ろくろ」の発祥の地であると言われており、渡来人が技術をもたらしたと考えられている。近江に八幡瓦や石工などの職人が多かったのも渡来系の技術を受け継いだからであると考えられている。つまり、渡来人の先進的な考えが商の発展をもたらし、それが近江商人の始まりになったのではないかと考えるのである。

近江商人を考える場合は中世の時代を研究すべきである。中世の商人は村落共同体として村単位で行商を行っていたようである。そこには神社が宮座として深く関わっていたと考えられている。その証拠に大正時代に今堀日吉神社から発見された古文書には宮座に関する「定め」が記載されている。つまり、宮座が深く関わって村落共同体として商いに取り組む事による絆の強さと、神仏に対する信仰の強さが多くの近江商人を輩出する基盤と

なっただと考えられている。

書籍では「近江の宮座」が参考になる。その他、近江研究のための重要な古文書は湖北の菅浦神社の古文書、近江八幡奥津島神社の古文書がある。また、近江商人を語る場合は主人が行商に行っている間に家庭を守っていた婦人や家族の貢献にも注目しなければならない。



(たねや店内)

現在の株式会社たねやの山本社長は9代目。明治5年、7代目の時代に菓子の製造を始め現在に至っている。それ以前は種を取り扱っていた。また、江戸時代には材木の取り扱いも行っていたようである。

5. 西川文化財団訪問

近江商人のなかで最も古い歴史をもつ「布団の西川」で有名な西川家を訪問、西川文化財団事務局長の中沢氏からお話を伺った。訪問した家は西川家二代目甚五郎氏の邸宅で非公開となっている。また、西川文化財団は13年前に西川家に残っている古文書の整理のために設立された財団である。



(西川甚五郎邸)

西川家は1566年初代西川仁右衛門が近江国蒲生郡で商売を始めた年をもって創業の年と定めている。本年で創業440年である。現在の近江八幡町に移り住んだのは1587年と

されている。当初は山形屋という屋号で商売をしており、主に蚊帳や畳表の商いを行っていた。

二代目甚五郎のときに麻生地のままに織られた蚊帳を、萌黄色に紅布の縁の蚊帳を考案し、近江蚊帳の代名詞になるほど有名になった。また、1615年には早くも江戸に支店（つまみだな）を出している。「つまみだ」とは新しい土地を開墾するという意味がある。5代目利助が手掛けた弓の販売は関東一円の販売を独占するまでになり、西川家の発展の基礎となったと言われている。また、西川家7代目は西川家中興の祖と呼ばれ、現代に通じる改革を行ったことは注目される。

* 積立金制度

純益の中から普請金（再建費用）、仏事金、用意金（本家の不慮の出費に対応する）の3つの積み立てを行い、目的に応じて貸し付の制度が行われており、1799年に「定法書」として明文化されている。

* 別家制度

1600年代後期から別家として独立させる制度が始まっている。定法目録として明文化されている。

西川家8代目は「三ツ割銀制度」と言って、789年以降年二回の決算を終えると純益の三分の一を従業員に配分する、一種の賞与制度で手腕を発揮した。しかし、奉公人の意欲は刺激したが、遊び心を誘発する害も生まれた。この後、8代目は茶屋遊びが過ぎて家督を取り上げられて隠居させられる結果になってしまう。同家の家訓には「押込め隠居」の条項の記載もあると言うことである。

西川家では1667年には勘定帳が整備されており計数管理による経営がおこなわれていた。それは、現存する「最古の勘定帳」といわれている。つまり毎年二回営業報告と決算報告を江戸から近江に報告していた。また、勘定目録帳に「定め」という項目がある。1807年の勘定目録帳の「定め」には以下の事が書かれている。

1. 御公儀様、御法度は守ること、掟（業界の掟）は守ること。
1. 家内（店内）では睦まじく、家業に専念すること。
重要な事、商品を良く吟味して安く販売し、品薄な場合でも高く売ってはならない。
そして、世間の害となることを行ってはいけない。

2月と8月の年二回の決算時に、従業員に「定め」を徹底させていたと思われる。勘定

帳は西川家3代の時代に整備されたものであるが、それが、どのような経緯で整備されていたのかは分かっていないが、大陸の影響を受けていたことは確かであるらしい。

現在企業ではコンプライアンスと言うことが叫ばれているが、200年前から既に実践されているのである。これらの制度、規定の整備が西川家を440年間存続してきた理由であると考えられる。なお、西川家の定法目録は現代語に訳されて一般に公開されている。

西川家の代名詞である「布団」の販売を始めたのは1887年、明治20年からである。それまでは布団は買うものではなく、自家で作るものであった。それをいち早く商品化して商売の対象とした。そして、消費生活の構造が変化するにしたがって「布団」は主要商品に育って今日に至っている。その時代で様々な商いを行なうという近江商人の特徴を良く表している。

おわりに

今回近江を訪問して、近江商人についての理解を深めることができた。それは、単に近江商人のルーツを知るのではなく、経営の本質について知ることであった。今日米国型の経営、教育手法が持て囃されるなかで、江戸時代に近江商人として開花した伝統的な日本型経営の素晴らしさと、その背景にある精神文化を再認識すべきであると考え。そして、彼らが家訓、店則、遺言、等で我々に残したメッセージを実際の経営に生かすことが必要であると考え。

<参考文献>

1. 『商家の家訓』 近江商人博物館
2. 『西川 430 年躍動の軌跡』 西川産業株式会社

<取材先>

1. 近江商人博物館
 2. たねや 近江文庫 専務理事 川島民親氏
 3. 財団法人 西川文化財団 事務局長 中澤儀一郎氏
-